

新型コロナで取り上げられた病院内の「普通の会話」 iPadとJamf Proが支える新しいコミュニケーション

聖マリアンナ医科大学病院 様
Appleデバイス管理ソリューション Jamf Pro導入事例



jamf | PRO

聖マリアンナ医科大学病院は、1974年2月の開院以来、“生命の尊厳を重んじ、病める人を癒す、愛ある医療を提供します”を理念に、特定機能病院として最先端の高度医療からプライマリーケアまでを提供。また、教育・研究機関として優れた医療人・研究者の育成にも力を注いでいます。さらに、法人全体として、神奈川県川崎市・横浜市に4病院と1クリニックを構え、地域の中核病院として地域に密着した医療を提供しています。

そんな同院では、現在60台のiPadを「共有iPad」として活用するほか、88台のiPadを附属4病院と1クリニックに配付し、MDMのJamf Proによって端末管理を行っています。新型コロナウイルス感染症への対応で医療現場は大変な状況にありますが、その対策の一環として導入したのが、iPadとJamf Proという組み合わせでした。



iPadの活用に至った背景やJamf Pro導入による効果などについて、総務部総務課 課長・奥島英明氏、IT戦略推進室 兼 看護部 主任・藤本泰博氏、IT戦略推進室 主任・野々宮佑樹氏に詳しく伺いました。

60台のiPadを「共有iPad」として利用—価値あるオンライン交流会の実現

●「心のケア」に使われるiPad

聖マリアンナ医科大学病院（以下、同院）における新型コロナウイルス感染症への対応の開始は、昨年2020年に遡ります。横浜港に着岸したダイヤモンド・プリンセス号の患者を2月初旬に受け入れ、それ以降は重症患者を中心に、酸素投与の必要な中等症および軽症の患者についても積極的な受け入れを行ってきました。総務部総務課 課長・奥島英明氏は、当時の様子をこのように振り返ります。

ハイライト



先進的高度医療を提供する
地域中核病院



新型コロナウイルスの影響による
スタッフの心のケアが課題



共有iPadとJamf Proで
オンライン交流会を実現



業務のさまざまな用途へと広がる
iPadの利活用



Jamf Proによる
安全効率的な端末管理



「最初はどのような感染症か全くわからない状況でしたので、救命医療や感染症の専門家が先頭を立て、マンパワーを割いて懸命に対応していました。しかし、未知のウイルスということもあり、現場のスタッフにかかるストレスは大変大きなものでした。そこで、医師や看護師はもちろん、事務職員も含んだ約20名から成る『後方支援チーム』を2020年5月に立ち上げ、最前線で戦うスタッフを精神面や環境面からサポートする体制を整えたのです」

その中で大きな課題の1つとして挙げたのが、現場スタッフの「心のケア」だっ

たと言います。コロナ禍において不要不急の外出の自粛はもちろんのこと、職場では業務以外の会話が制限されたり、休憩中の会話が禁止されたりなど、医療従事者は大変ストレスフルな生活を余儀なくされました。また、もし自分が感染したら同僚や患者にうつしてしまうという恐怖や不安もあります。家族への感染を恐れて、病院や宿舎に寝泊まりするスタッフもいるそうです。

「特に、コミュニケーションが不足していると感じました。普段であれば、仕事中でも休憩中に冗談を言ったり、プライベートで会食や飲み会をしたりできます。でも、それがすべて取り上げられてしまったのです。このままでは院内の閉塞感が強まり、チームの結束感も弱くなり、精神的に参ってしまう人が出てくるのではないかと。そこで、iPadを自宅へ持ち帰ってもらい、くつろぎながらオンラインでスタッフ間のコミュニケーションを図ってもらおうと考えたのです」

● 共有iPadとJamf Proで解決

ただし、それを実現するうえではiPadにしっかりとセキュリティ対策が必要です。同院では業務パソコンの持ち帰りを原則禁止するなど、医療機関として厳しいセキュリティポリシーのもとICT環境を整備・運用しています。また、購入したiPad60台をスタッフ間で共有するためには、利用者のプライバシーも配慮しなければなりません。そこで、同院が目をつけたのが「共有iPad」の機能と、それを可能にするMDMのJamf Proでした。

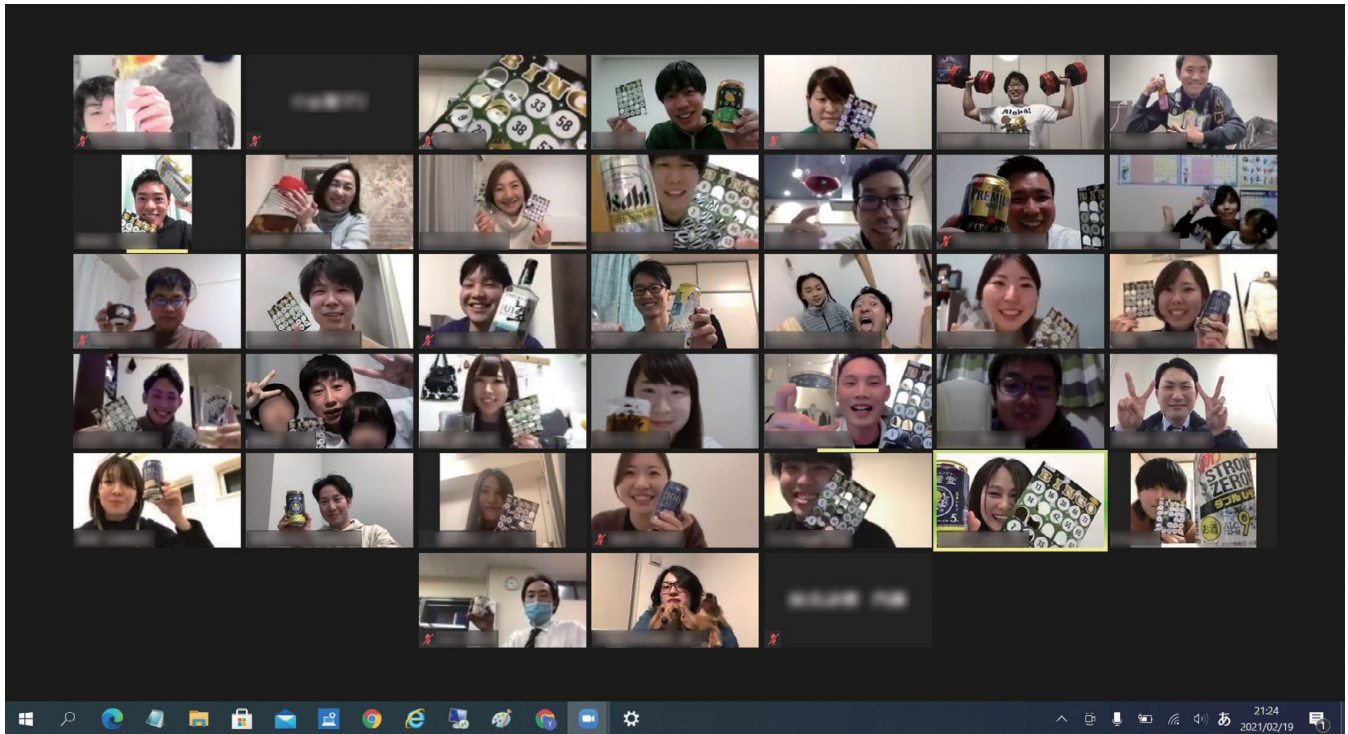
具体的には、Jamf Proを使って60台のiPadを「共有iPad」として設定。さらに、ユーザ名やパスワードを使用せずに誰もがログイン可能な「ゲストモード」を活用することで、利用者がサインアウトすると端末内のすべてのデータ（ログイン履歴や閲覧履歴など）が削除されるようにしたのです。これならばiPadをスタッフ間で共有しても個人のプライバシーを保ったまま、ビデオチャットなどを楽しんでもらえます。

実際の効果に関して、IT戦略推進室兼 看護部 主任・藤本泰博氏は次のように語ります。

「院内の異業種交流会を毎年行っているのですが、今年は実際に顔を合わせた形での交流会を開催できなかったため、先日60人ほどを集めてiPadを使ったオンラインでの交流会を行いました。私は看護師として普段仕事をしていますが、異業種の方の話を聞く



とやはりコロナ禍で同じように大変だと言います。特に、最前線で働いている人は精神的に過度な負担がかかったり、バーンアウトしてしまってもおかしくありません。ですから、こうしたオンラインでの交流会に参加して、感染を気にすることなくリラックスして会話し、少しでも息抜きできるのは非常に価値のあることだと考えています」
交流会終了後のアンケートでは参加者の満足度は非常に高く、今後も継続的に続けていくそうです。また、共有iPadはこうしたコミュニケーションの活性化だけでなく、日頃の会議や研修会でも利用されるようになり、業務におけるコミュニケーション不足の解消にも役立っていると言います。



● 多彩に使われる88台のiPad

また、同院では上述の共有iPadとは別に88台のiPadを購入し、附属4病院(大学病院、東横病院、西部病院、多摩病院)と「プレスト&イメージング先端医療センター附属クリニック」の5施設に配付しています。その購入のきっかけとなったのも新型コロナウイルスだったと、IT戦略推進室 主任・野々宮佑樹氏は言います。

「当院では、新型コロナウイルスに関する院内サイトをいち早く起ち上げました。新型コロナウイルスの状況をタイムリーに共有したり、当院を応援してくださる方々からのメッセージを共有するために使うものです。88台のiPadは、それぞれの病院の各病棟、薬剤部や臨床検査部といった部署ごとに数台ずつ配付しています。もちろん、各部署には共有用のノートパソコンがあるのですが、それらは基本的に据え置き型のものです。一方、iPadであれば持ち運びが容易というメリットを最大限活かしつつ、MDMによってセキュリティを担保して安心して使うことができます。新型コロナウイルスで院内が緊急している中で、少しでも情報を共有しやすかったのです」

また、これらのiPadは「リモート面会」にも使われています。新型コロナ患者数の増加により患者と家族の面会を禁止せざるを得ない状況下において、病状の説明や患者の荷物を届けるためなどにご家族が来院された際に必要に応じて、ご家族にiPadを渡してFaceTime (iPadに標準搭載されるビデオ通話機能)を利用してロビーから、入院中の患者とオンラインで面会していただくといったこともしました。病棟に入って直接面会できないことによる患者や家族の不安を少しでも解消するための施策です。

そのほか、iPadは病棟のスタッフがeラーニングや医療の雑誌・学会誌などの図書を閲覧するための学習ツールとして利用したり、翻訳アプリを使って言語の異なる患者との簡単なコミュニケーションに利用したり、附属病院の1つでは手指衛生確認アプリを用いて患者と触れ合う前後の感染予防に利用していると言います。

セキュリティ対策を重視—Jamf Proで 管理の手間も削減

● Jamf Pro導入のメリット

同院では、今回の大規模導入の前にも、院内での活用を模索して数十台のiPadを導入していました。しかし、従来は端末の設定を院内のスタッフが手動で行っていたため、最初のキッティングや端末の各種設定 & アプリケーションを変更する際には端末をその都度回収する必要があり、野々宮佑樹氏は大変な手間に感じていたと言います。

「今回の大規模導入にあたってはMDMの必要性を強く感じていました。、そして、その中でも良い評判を聞いていたJamf Proを選びました。一番の大きなメリットは、端末の設定をリモートで行えるため、運用・管理が大変楽になったことです。共有iPadの設定に関してはJamf社の手厚いサポートがありましたし、それ以降の普段の運用においては特別なサポートなしに使いこなせています」

また、同院では5施設に端末を配付していますが、施設ごと、または施設の部署ごとに必要なアプリを配付したり、利用可能なWi-Fiを定義したりするなど端末の設定を適宜調整しています。Jamf Proではこうした多拠点における端末管理でも、病院ごとにグルーピングしたり、部署ごとにグルーピングしたりして容易に設定を行えるのもメリットとのこと。さらに、88台のiPadは外部への持ち出しを禁止にしていますが、60台の共有iPadも含め、万が一の端末の紛失時／盗難時には遠隔から端末の位置情報の取得が可能のほか、端末内のデータを消去できるリモートワイプや、端末を一切操作できないようにするリモートロックといった機能を設定していることも、セキュリティ対策を重視する同院では欠かせないものであるのは言うまでもありません。

● 終わりに

新型コロナウイルスの沈静化の兆しは未だ見えず、同院をはじめとする医療機関や医療従事者は大変な生活を余儀なくされています。そうした環境を改善するために同院で導入したiPadとJamf Pro。当初は60台の共有iPadも、88台の各施設のiPadも「コミュニケーション」が主目的でしたが、Jamf Proによる安全で楽な運用管理のもと活用され始めると、単なるコミュニケーションデバイスとしてだけでなく、現場のさまざまな業務に役立つ形で活用され始めたのが印象的です。これからも、さらに利活用が広がることで、未曾有の事態に挑んでいる現場が少しでも和らぐことを願っています。

